

[シンポジウム3]

伊藤圭介の先見性と意志の強さ

山内 一信

東員病院

伊藤圭介は名古屋の生んだ植物学者、博物学者である。幕末から明治にかけての激動期いかに学者として活動し、一家をささえたのかを検証する。そこから見えてくるのは圭介の学者としての先見性と意志の強さである。

圭介は町医西山玄道次男として1803年(享和3)名古屋呉服町で生まれた。父の実家伊藤姓を名乗り、父から医学を学んだ。さらに小野蘭山門人水谷豊文について本草学を学ぶ。15歳頃から父、実兄大河内存真、豊文らについて、尾、三、勢、濃、信の諸州を採葉、1820年18歳で漢方医を開業した。翌年蘭方医を志し京の藤林普山さらには名古屋の吉雄常三に蘭学を学び、蘭方医となった。1826年豊文や存真とともに江戸参府途中のシーボルトに宮の熱田宿で会見、翌年長崎、シーボルトのもとで研究し、帰名時シーボルトからツンベリー著『日本植物誌』を贈られた。

1829年(27歳)これを訳述註解し、『泰西本草名疏』として自費出版した。発刊は西洋の本草説に基づいた集成書を作りたいとする強い意志があったからという。ここで乗り越えなければならぬ第一の関門があった。自費出版のため資金が必要であった。土地、家、屋敷等を担保に325両ほどを工面し発刊に漕ぎつけた。もう一つの問題は1828年に起こったシーボルト事件である。シーボルトの名を付すところには稚膽八郎という偽名を用い、筆禍を免れた。本書刊行の意義はリンネの24綱分類法を初めて体系的に紹介、綱、目、属(類)、種の分類段階を説明し、おしべ、めしべなどの命名にある。これらの知見は宇田川榕庵の『植学啓原』や飯沼慾齋の『草木図説』に影響を与えた。

この後洋学者としての、活躍が始まった。1841年『暎咭喇國種痘奇書』校刻により牛痘法を紹介、上田仲敏邸内に洋学館を開設、蘭学を教授した。1850年自宅に種痘所を設け種痘施術を開始、存真、石井隆庵とともに尾張藩種痘所取り締まりを命ぜられた。1851年『遠西硝石考』の訳述書、『万宝叢書硝石篇』を刊行。1859年(安政6)尾張藩寄り合い医師に任じられた。さらに洋学翻訳教授、洋学館総裁心得となった。1861年(文久元)蕃書調所物産方に出役、シーボルトと再会した。1863年蕃書調所の後、洋書調所を辞任、後事を門人田中芳男に託し帰名した。

ここに二番目の難関、洋学をどう発展させるかの課題があった。当時尾張では植松茂岳らの国学も盛んで、藩政も14代徳川慶勝(勤王・国学派寄り)、その義弟15代徳川茂徳(佐幕・洋学派寄り)、さらに16代徳川義宜(後見慶勝)と藩主が入れ替わり、大手を振って洋学を広めることはできなかった。中でも洋学派の盟主、仲敏が1863年に没してからは上田邸にあった洋学館を自宅に移してその苦境を乗り越えた。1868年洋学に理解のあった佐幕派とされる重臣らが青松葉事件で処罰される中、京都守護を命ぜられた徳川義宜に従って与えられた職務に黙々と従事した。この動乱期洋学者として乗り切った圭介は明治維新直後、仮病院、仮医学校設立の建議を行ない、名古屋大学設立の基盤を作った。

三番目の山は東京での活躍、仕事ぶりである。1871年(明治4)文部省出任を命ぜられ上京、文部少教授・編集権助などを歴任、『日本産物志』の編集に携わった。『日本産物志』は圭介の物産研究成果の集大成であり、その実現は喜びそのものであった。山城、武蔵、近江、美濃、信濃の5部11冊が文部省から刊行された。1875年(明治8)(73歳)には『日本植物図説』草部イ初篇を自費出版した。本書は圭介の植物研究の方法を最もよく示す著書とされ、家学である植物学を三男謙に継がせたいとする意志が謙編として発刊したことからうかがえる。しかし謙は早世したためか初篇1冊のみの発刊となった。謙の早世、四男恭四郎の教育問題など圭介にとって心穏やかでない日々が続く中、最晩年に至るまで学者としての活動を緩めず大成する。激動期を先見性と強い意志で生き抜いた博物学者であった。